



日

本の源流再発見

トンバイ塀

日本磁器発祥の地



佐賀県伊万里市、唐津市、長崎県波佐見町などとともに、日本遺産「日本磁器のふるさと 肥前～百花繚乱のやきもの散歩～」に認定された有田町は、およそ400年前に日本で初めて磁器が生産された日本磁器発祥の地。現在でも窯業が盛んで、町のそこかしこに窯元と販売店があります。

File 6

佐賀県西松浦郡有田町

磁器とともに400年、煙突とトンバイ塀の町

陶磁器は食器や花器など、実用品であるだけでなく、私たちの暮らしを彩る工芸品でもあります。陶磁器にはその製法、原料によりさまざまな種類があり、陶土が原料の陶器は古来日本でも盛んに作られてきました。一方、陶石が原料の磁器が作られるようになったのは、江戸時代初期。約400年前、有田町でのことです。

17世紀初頭、朝鮮人陶工の初代金ヶ江三兵衛かながえさんべえ（通称：李参平りさんべい）が、有田町に陶石を発見します。磁器の製作は陶石を砕いて水に溶くための豊富な水量と、高温で焼成できる油分が多く

高温で燃える松の木の確保が必須。李参平はこれらがそろって有田町で磁器の生産を始めました。産業としての有田焼が始まったのは1616年といわれ、伊万里港から出荷されていたため、伊万里焼とも呼ばれています。

1640年代前半までの初期の伊万里焼は、白地に呉須こす（焼くと藍色に発色する絵の具）だけで絵付けをしていました。この有田焼に革新をもたらしたのが、現在まで続く柿右衛門窯かきえもんがま。初代酒井田柿右衛門が、初めて色絵の焼成に成功したとされ、のちには濁手にごしてと呼ばれる温かみのある乳白色の生地



柿右衛門窯

に、赤を基調とする優美な色絵を生み出しました。多くの器がガスや電気窯で製造される今でも、この濁手の本焼成は薪を焚いて行います。柿右衛門窯では、通常作業場や窯を公開していませんが、春と秋の陶器市の時期には、公開することもあるといいます。

有田町にはそこかしこに窯元の煙突があり、磁器の販売店が軒を連ねて



▲ 泉山磁石場

陶祖である李參平が陶石を発見して以来、磁石採掘により一帯の山が崩されました。「400年かけてひとつの山を焼き物に変えた」とわれています



▲ 佐賀県立九州陶磁文化館

柴田夫妻コレクションには、江戸時代初期から幕末にかけての有田焼(古伊万里)が1万点以上そろっています。常設で、うち約1,000点を展示



▲ 柿右衛門窯

薪窯は火入れ後40~45時間焼き続けるため、1回で800~1,000束の赤松の薪を使うそうです



▲ 天狗(てんぐ)谷窯跡

山の斜面を利用した登り窯で、李參平ゆかりの窯でもあります

います。なかでも内山地区は、蔵造りの商店や窯元のショールームが並ぶ雰囲気のあるエリア。その裏通りに多く残るトンバイ塀は、有田町ならではの風景です。トンバイ塀は、解体した登り窯のレンガを利用して造られており、敷地の境界を表すだけでなく、他者から技術を守る囲いの役も果たしていました。有田町ならではの風景といえば、裏通りを流れる小川にも注目。流れる水の透明度にも目を奪われますが、よく見ると水底に多くの陶片が。やきものの町の歴史が感じられます。なお、現在は貴重な文化財となっているため、これらの陶

片を持ち帰ることは禁じられています。

そして、有田町でぜひ訪れたいのが、九州の古陶磁から現代作品まで網羅した「九州陶磁文化館」。有田焼の変遷をたどり、学術的にきわめて貴重といわれる「柴田夫妻コレクション」や、輸出された有田焼を集めた「蒲原コレクション」など見どころも多数です。

ココに注目

28種類のスパイスを使った本格カレーが有田焼の器に入っている創ギャラリー おおたの「有田焼カレー」は、駅弁もあり。お取り寄せも可能です。



日立グループ事業所紹介

今回訪れた佐賀県には日立システムズのグループ会社である九州日立システムズの営業所があります。九州エリアに根ざし、システム導入に際してのコンサルティングから設計・構築・保守までの全領域をサポートしています。

株式会社 九州日立システムズ 福岡市博多区博多駅南2-12-22

<http://www.kyushu-hitachi-systems.co.jp/>